

プログラム・ノート

相場ひろ

ドビュッシー：弦楽四重奏曲 ト短調 作品10

クロード・ドビュッシー(1862～1918)の弦楽四重奏曲は1893年に書かれ、同年12月29日に初演された。

全体の構成などに古典的な形式感を堅持している点、彼の作品としては特異であるが、1889年のパリ万博で耳にしたジャワのガムラン音楽や、アレクサンドル・ボロディン(1833～87)をはじめとするロシア音楽の影響を受けたその響きは、西欧的な和声感から大きく逸脱していて、初演当時は多くの聴衆を当惑させた。とはいえ、作品に対する評価は徐々に高まり、こんにちでは近代フランスにおける最良の弦楽四重奏曲のひとつとみなされている。

バルメール：『風に舞う断片』〔日本初演〕

作曲家イヴ・バルメール(1978～)はヴォーチェ弦楽四重奏団の委嘱を受けて、2021年、ドビュッシーの弦楽四重奏曲と共に演奏する作品として『風に舞う断片』を書き上げた。タイトルはスイスの詩人フィリップ・ジャコテの詩集『緑の手帳』に収められた詩編から採られた。ドビュッシーが自然の事象から発想を得ていたように、バルメールは風の息吹や流れ、はかなさがもたらす感覚をとらえようと試みている。3つの楽章からなり、楽章ごとに特徴的な奏法や書法を用いつつ楽器の音色を探求していく姿勢にも、ドビュッシーの音楽への呼応が感じられる。

ドビュッシー(バルメール 編曲)：『抒情的散文』より 第1、2、4曲(ソプラノと弦楽四重奏用編曲)〔日本初演〕

1892年から翌年にかけて作曲。歌曲は本来伝統的な詩法に則った韻律詩を用いるのが一般的であったが、彼はその慣習に抗い、定型的な韻律によらない詩を自ら書き上げ、それに音楽を付したのだった。テキストには押韻や反復、あるいは伝統的な韻律も顔を出しており、散文詩と言うよりも自由韻律詩と言うべきだろう。その自在なリズムに乗って、後年の歌劇『ペレアスとメリザンド』を思わせる自在で夢幻的な歌が繰り返される。

ラヴェル：弦楽四重奏曲 ヘ長調

モーリス・ラヴェル(1875～1937)の弦楽四重奏曲は、1903年4月に全曲が完成し、翌年3月5日に初演された。

ドビュッシーとラヴェルの弦楽四重奏曲には、4楽章の構成や循環形式の採用など、多くの類似点が見られる。しかし同時に、同じ構成の作品であるからこそ、彼らふたりの間の気質や美学の違いが明確に浮かび上がっている。ドビュッシーの音楽がほの暗い夜の雰囲気やまといつつ、さまざまな破格を内に取り込んで外に向かって開けていく佇まいをみせるのに対して、ラヴェルの音楽は真昼の陽光を思わせる明るさに満ちるとともに、響きの純化を目指して夾雑物を厳しく削ぎ落としていくのである。

(あいばひろ・音楽評論)